

霞

— 2007年度秋季展示室だより — 土浦市立博物館

平成19年10月2日発行 (通巻第1号)

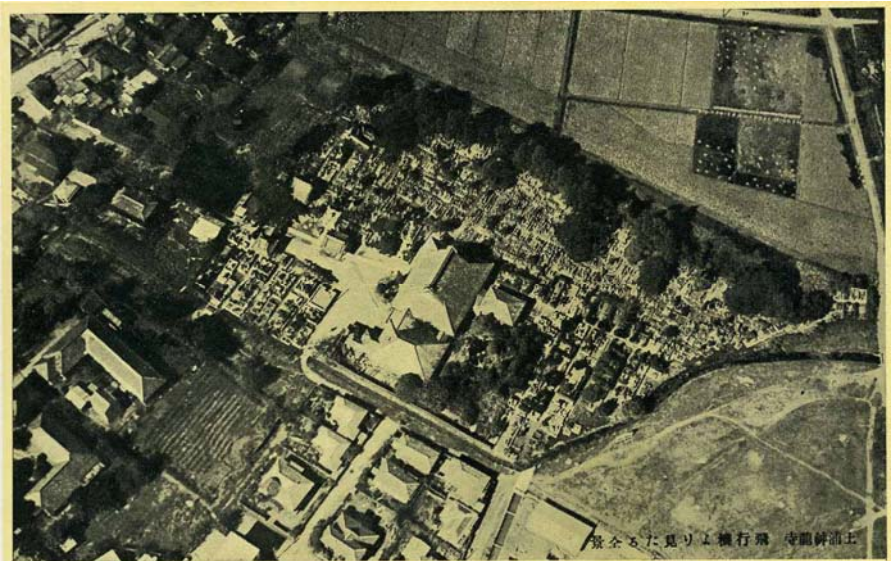
土浦市立博物館では春(4~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに実物資料の展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の展示資料の見どころをご紹介、解説するものです。また、展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

目次

- 古写真・絵葉書にみる土浦(1) … 1
- 博物館からのお知らせ … 1
- 【2007年度秋季の展示資料解説】
- 瓦塔・瓦堂(古代) … 2
- 国宝 短刀 差表銘「筑州住行弘」
(大名土屋家の文化コーナー) … 3
- 岡部洞水「唐子図」対幅(近世) … 4
- 「天王御祭礼附留」にみる祭礼行列
(近世) … 5
- 東京で発掘された土浦の汽車土瓶
(近代) … 6
- 市史編さんだより … 7
- 「霞」短信・コラム(1) … 8

古写真・絵葉書にみる土浦(1)

絵葉書「土浦神龍寺 飛行機より見たる全景」 昭和初期



神龍寺(現:土浦市文京町)を上空から写した絵葉書で、画面上がほぼ西、右が北

になります。神龍寺東側に旧国道6号が開通する昭和9年以前に撮影されています。画面の右下に広がる平坦地は土浦城三ノ丸跡で、その輪郭にそって堀や土塁の跡がみられます。また、神龍寺西側(上部)の直線的に伸びる線も堀の跡と思われます。土浦城西に隣接していた神龍寺境内を知ることができる貴重な資料といえます。「土浦神龍寺」絵葉書では、このほか本堂の全景、秋元梅峯和尚の像、門前の桜並木、色川三中の碑などがあります。「土浦神龍寺」の絵葉書は情報ライブラリーで閲覧できます。【検索キーワード「土浦神龍寺」】

博物館からのお知らせ

テーマ展「土屋家の刀剣 土浦城東櫓収蔵の刀」

10月5日(金)~10月28日(日) 博物館展示室1・2

かつて東櫓には、将軍家からの拝領品である刀剣や茶道具、絵画、書などが納められており、刀剣は6口が確認されています。その内、伝来がはっきりしている5口は、2代藩主政直の治世において拝領したもので、3口は5代将軍綱吉、2口は6代将軍家宣から下賜されたものです。政直は貞享4(1687)年から享保3(1718)年にかけて、30年余老中を勤めています。この間の功績により下賜された刀剣は、土屋家が将軍家から厚い信頼を得ていた証といえるでしょう。また、将軍家から下賜された品々を城下が一望できる東櫓に納めていたことは、将軍への敬意を表すとともに、東櫓が土浦藩のシンボリックな存在であったことがうかがえます。期間中、国宝1口・重要文化財4口・重要美術品6口を含む15口の刀剣を展示いたします。

テーマ展 展示解説会

10/14(日)、10/20(土)

午後2時から 解説:当館学芸員

抹茶の無料接待

10/7 【土浦第二高等学校茶道部】

10/21 【つくば国際大学高等学校
茶道部】

10/28 【土浦日本大学高等学校
茶道部】

いずれも日曜日の午後1時~3時、
各回先着50名様までとなります。

瓦塔・瓦堂

— ムラのお堂に置かれた七堂伽藍のミニチュア —

瓦塔・瓦堂は粘土を焼いて造られた小型の建造物で、奈良時代に出現し、平安時代に盛んに造られました。五重塔や金堂のような実物の塔や堂を模倣して屋根、軸部などの各部を個別に作り、それらを積み上げて組み立てました。ここでご紹介する瓦塔・瓦堂は、土浦市の根鹿北遺跡から出土した破片資料をもとに、粘土で実物大に全形を復元したものです。2007年7月オープン of 展示改装にあわせて、新たな展示資料として製作しました。破片は型取りで複製し、復元粘土の中に埋め込んでいます。復元の内容・方法など詳細は、『土浦市立博物館紀要第17号』の池田敏宏氏「土浦市根鹿北遺跡瓦塔・瓦堂の復原」に報告されておりますので、ご参照ください。

根鹿北遺跡は土浦市今泉町にあり、天の川中流域の台地上に位置しています。旧石器時代から平安時代の遺跡で、平安時代の遺構として掘立柱建物跡4棟、竪穴住居跡5棟、火葬墓1基が発見されました。瓦塔・瓦堂の破片は、台地の先端にある第2号掘立柱建物跡を中心に出土しています。この掘立柱建物は仏堂施設と考えられ、瓦塔・瓦堂はこの中に安置され、一緒に出土した素焼きの小皿で灯明を供えて仏事が執り行われていたと考えられます。

根鹿北遺跡の瓦塔・瓦堂の年代は平安時代前期、9世紀中頃のものと考えられています。この頃、地方への仏教浸透の新たな潮流として、一般の集落内に仏堂が登場し、いわゆる「ムラのお寺」が営まれるようになります。飛鳥・奈良時代に始まった豪族の氏寺・郡寺や国分寺といった古代寺院の場合、金堂や講堂、五重塔など複数の立派な瓦葺の建物が建ち並ぶのに対し、この「ムラのお寺」の多くは瓦を葺くことのない掘立柱建物で、外郭を廻る塀などありません。つまり、お寺というよりはお堂と呼ぶにふさわしい外観を呈していたと想像されます。

当時、僧がこのお堂を拠点に周辺の集落をめぐり、法会などを執り行うことで、仏教信仰が民衆にまで広く浸透していったと考えられます。実物を模倣して造ったミニチュアの瓦塔・瓦堂は、小さなお堂のみを構える「ムラのお寺」の中にあつて、大規模な寺院の七堂伽藍をイメージさせる象徴として、人々の崇敬の対象となり得たのではないのでしょうか。

全国的に見ると、瓦塔・瓦堂は関東地方など東日本を中心に多く発見されています。『土浦市立博物館紀要第9号』の池田敏宏氏「仏教施設における瓦塔出土状況について(素描)―土浦市根鹿北遺跡出土瓦塔をめぐって」では、他地域の事例と比較検討し、根鹿北遺跡の瓦塔の特徴や仏堂施設との関係について詳しく報告しています。あわせてご参照下さい。(塩谷修)



根鹿北遺跡の瓦塔(左)・瓦堂(右)

このページでご紹介した資料を中心とする展示解説会を11/3(土)午後2時から開催いたします。



国宝 短刀 差表銘「筑州住行弘」

差裏銘「観應元年八月日」

— 茨城県にある国宝は2件、国宝ってどんなもの? —

現在、茨城県内では土浦市が所蔵する「筑州住行弘」銘の短刀（以下、本刀という）と鹿島神宮の「直刀」の2件が国宝に指定されています。本刀は、毎年全国花火競技大会に合わせて特別公開していますが、時々来館者の方から「どのようなものが国宝になるのですか」という質問を受けます。

国が指定する文化財は、国宝と重要文化財があり「重要文化財のうち制作が極めて優れ、かつ文化史的意義の特に深いもの」が国宝に指定されます。重要文化財は、各時代の遺品のうち制作が特に優秀なものや、工芸史上又は文化史上特に貴重なもの、形態、品質、技法又は用途など意義深いものが指定されます。

しかし、これではどういうことなのか具体的には分かりませんので、本刀にあてはめた説明を試みましょう。本刀は「筑州住行弘」「観應元年八月日」の銘から、筑州（福岡県）に住む左文字派の刀工行弘が観應元（1350）年に造った短刀であることが分かり、行弘の所在地と活躍年代を知ることができます。

また、本刀は制作された当初の姿をほぼ完全な状態で保っており、保存状態が極めて優れています。さらに、本刀は行弘が活躍する以前の九州鍛冶の作風とは違って、鉄質の明るい良質の玉鋼（砂鉄を溶かした鋼）を使い、洗練された技法で制作されていることから、材質のみならず九州鍛冶に何らかの技術革新が起きたことが想像できます。

つまり、本刀は制作年代が明確で、保存状態に優れ、美術工芸品としての価値が高く、筑州左文字派の革進期を知るうえで欠かせない大変貴重な資料であることから、国宝の指定を受けたといえます。

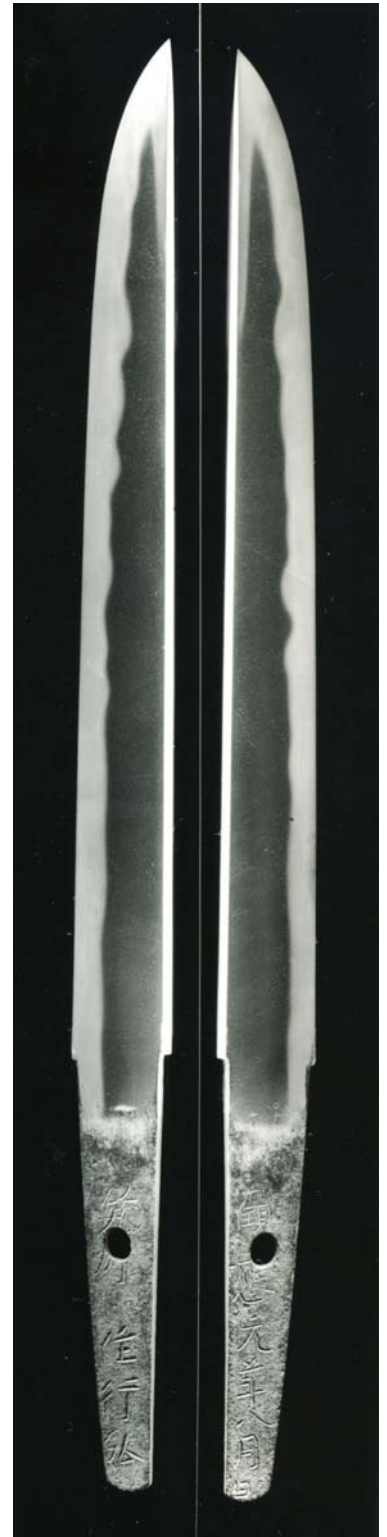
ちなみに本刀は、土浦土屋家2代藩主政直が正室幾宇子の父、松平若狭守康信（丹波国篠山藩主）から贈られた品です。

この短刀は、10月28日（日）まで公開しています。また、指定品以外の土屋家刀剣は、毎月展示替えを行なっています。展示替えの内容は、博物館ホームページのお知らせ「今月の土屋家刀剣」で紹介しています。

<http://www.city.tsuchiura.ibaraki.jp/section/kyouiku/6008/index.htm>

（中澤達也）

国宝 短刀 差表銘「筑州住行弘」（左） 差裏銘「観應元年八月日」（右）



このページでご紹介した資料を中心とする展示解説会を10/14（日）・10/20（土）午後2時に、「大名土屋家の文化」に関する展示解説会を12/1（土）午後2時から開催いたします。

岡部洞水「唐子図」(絹本着色) 対幅

— 土浦藩御用絵師の横顔 —

とんぼ釣り、こま回し、竹馬など動物や玩具で無心に遊ぶ子供たちが描かれています。

子供たちは髪型といい、カラフルな衣装といい日本風ではなく中国風です。このような姿の子供たちを唐子からこといいます。

唐子の表情は五人五様に描き分けられ、姿形も幼い子供らしい躍動感あふに溢れています。背景のタチアオイやとんぼ、棕櫚などの小物も丁寧な筆遣いで描かれています。

落款らくかんは「洞水愛敬筆」、印章は「甲子三百四十翁」の朱文方印が捺されています。

この絵の画家、岡部洞水おかべとうすいは正確な生年はわかっておりませんが、1780年頃の生まれで、嘉永3(1850)年7月に亡くなるまで土浦藩士として絵師を生業としていました。洞水の祖父も父も画業を専門にしていたが、洞水は幕府の表絵師筆頭、駿河台狩野家の洞白愛信おもとえしひつとう (1772~1821) に学んで、師匠から洞水愛敬と名のすることを許されました。唐子図は狩野派の絵師が好んで描いた画題のひとつです。

博物館では平成14年に『土浦藩絵師岡部洞水—知られざる狩野派の画人—』と題した特別展を開きました。副題にもあるように、洞水の作品や活動が明らかになってきたのはごく最近のことです。

この展覧会では長崎県立美術博物館が所蔵する「魚族図」(対幅)を借用して展示しました。右幅には鯉や鯰こい なますなど淡水に住む魚が、左幅には河豚や鯖ふぐ さばなど海水に住む魚がそれぞれ描かれています。見る人を水中にいるかのような錯覚に陥らせる作品です。洞水はこれを描くにあたって、江戸時代の絵師たちの多くがそうだったように粉本ふんぼん(日本画を描く際の手本)や博物画などを利用したのでしょうか。しかし、素早く動く魚、ゆったり方向を転換する魚などの真に迫った描写からは、水中の活魚を飽くことなくながめ続けている洞水の姿を想像せずにはいられません。

洞水には「牡丹に蝶図」という作品もあります。牡丹の美しさもさることながら、花に群れ飛ぶ三種の蝶の姿形と羽の模様は、実際の蝶を根気強く観察していなければ描けない細かさです。

明らかになってきた作品を通観すると、洞水は、もしかすると人物や風景画よりも昆虫や魚などに特段の筆の冴えきえを見せるのではないかと、そんな思いがわき上がってきます。「唐子図」の赤とんぼを改めてじっくりご覧ください。

ところで、この作品の箱には「玉寿院様御遺物」(玉寿院様のかたみ)と墨書されていました。「玉寿院」が誰なのか現在のところは不明ですが、大名の子女であったようです。かわいらしい子供の図はいかにも武家の女性が眺めて楽しむのにふさわしい作品といえましょう。この図は最近博物館が入手して修復を施しました。大名の子女の持ち物であったのではないかと解釈から、表具もそれにふさわしいものにいたしました。

(木塚久仁子)



右幅 部分(こまを回す)



左幅 部分(糸に結びつけられたとんぼ)

このページでご紹介した資料を中心とする展示解説会を11/24(土)・12/22(土) 午後2時から開催いたします。



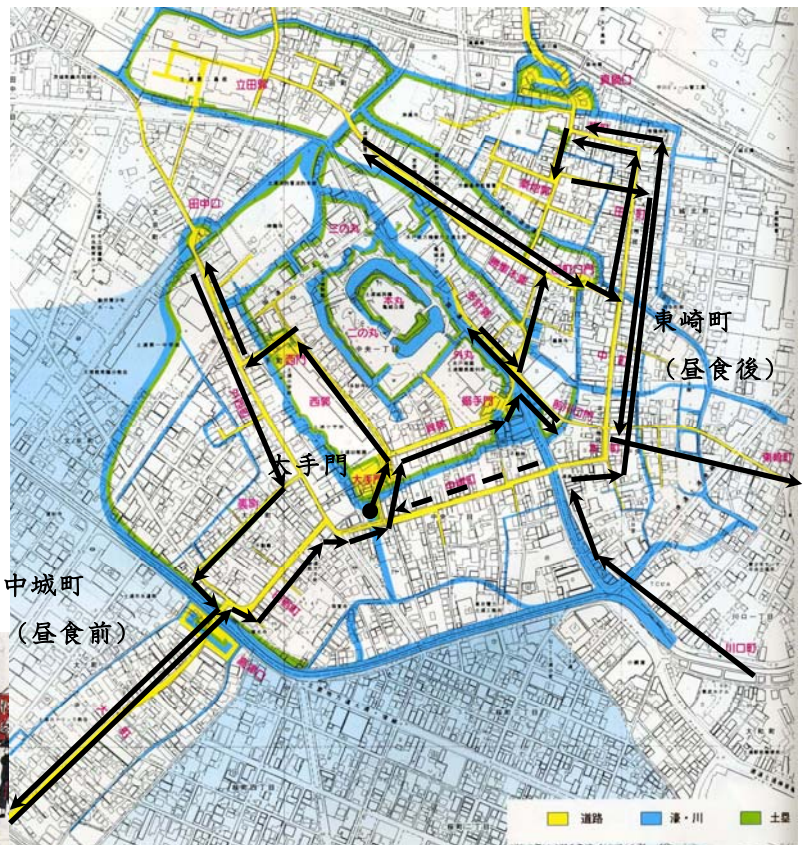
「天王御祭礼附留」にみる祭礼行列

— お城に入った祭礼行列 —

城下町土浦の祇園祭礼の様子は、「土浦御祭礼之図」「土浦町内祇園祭礼式真図」「土浦山車図譜」などから知ることができます。これらの絵画は当館の展覧会でも取り上げてまいりましたが、近隣の博物館への出陳や出版物での紹介も多く、注目を集めている資料といえそうです。絵画からは江戸天下祭り（祭礼行列が江戸城に入り、将軍の上覧を受けた祭礼の総称）の影響を受けた祭礼であったことがうかがえ、大都市江戸と城下町土浦との文化的なつながりを確認するうえでも貴重なものといえます。

土浦の祭礼も天下祭りと同じように、城のなかに祭礼行列が練り込むものでした（ただし、土浦藩主は定府で、祇園祭礼の時期には江戸にいるため実際の上覧をしたわけではありません）。江戸時代中頃の様子をご紹介します。「天王御祭礼附留」によれば、6月12日に真鍋村の天王様（八坂神社）から町役人らがむかえた牛頭天王の神輿は、翌13日に土浦城へ入りました。そして、神輿のあとに続いて、今度は町々の練物が大手門から城内に入りました。練物は内西町・外西町の武家屋敷を通過して西門まで進んで引き返し、裏町→大町→田宿町へ。昼食後に再び大手門から城内に入り前川町や鷹匠町を通り、「あかつ御門」（開かずの御門、田町口門）をくぐり田町→横町→築地→下東崎→川口へ進み、川岸通りを通り本町にでました。その後は「練物は北御門まで見送り」とあり、おそらく真鍋へ帰る神輿を送って北門まで進んだと思われます。この記録をもとに作成したのが下図です。記述が指し示す場所が不確定な部分や、細かな経路が不明なため、おおよそのルートしか示せませんが、町全体を練り歩いたことがわかります。

ところで、行列は二度も大手門をくぐり城内に入っています。土浦城下は行政的には「中城町」と「東崎町」の2つに分かれ、それぞれに名主がいました。行列は、昼食前は土浦城から中城町に属する町組（大町・田宿町・裏町など）へ、昼食後はふたたび城から東崎町（田町・横町・川口町など）へと、城を起点にして練物が移動したことになります。祭礼の当番となる町組は、毎年、中城町と東崎町から交互に出されていたようですから、城を中心にして二つの町で構成される城下町の特徴を、祇園祭礼のなかにもうかがうことができます。（萩谷良太）



「土浦御祭礼之図」(大祭の練物のうち「朝鮮通信使仮装」部分) 祭礼行列のルート(「天王御祭礼附留」より推定)

このページでご紹介した資料を中心とする展示解説会を10/27(土)午後2時から開催いたします。



東京で発掘された土浦の汽車土瓶

— 常磐線の開通とマチの近代化 —

両手にすっぽりと収まるこの益子焼の急須には、側面に「土浦」、「せ」・「た」の文字がはっきりと読みとれます。灰白色をした、かわいらしい陶器です。かつて駅でお弁当と一緒に売られたお茶の容器で、「汽車土瓶」と呼ばれました。「土浦」は駅名で、「せ（つ）た」は説田商店（弁当店）のことでした。

駅のお茶売りは明治22（1889）年に静岡駅から始まったと伝えられ、このような土瓶は明治30年頃から量産されました。大正10年頃にはガラス茶瓶、昭和に入ると型成形の茶瓶、昭和32、33年頃にはポリ容器が登場しました。現在ではペットボトルの飲料が主流となっています。土浦に鉄道が開通したのは明治28年のこと。土浦—友部間に日本鉄道海岸線（のちの常磐線）が開通し、翌年には田端まで延長されました。駅弁の構内販売が始まったのは明治32年で、最初に許可されたのが説田良三郎氏でした。この土瓶は早ければ明治時代末期頃のものかもしれません。

さて、この汽車土瓶をよくみると割れており、つなぎ合わせてあることがわかります。ふたもつる（もち手）もありません。実は割れた状態で土の中から見つかったものです。それも、土浦ではなく東京の汐留遺跡（新橋停車場跡）からでした。

明治5（1872）年に日本ではじめて鉄道が開業し、新橋停車場は東京の玄関口となりました。大正3（1914）年の東京駅開業後は貨物専用の汐留駅に、昭和初期の大改良工事を経て本格的な貨物駅となり、物流の大拠点として日本の経済発展を支えました。昭和61（1986）年に廃止されましたが、平成になり再開発に伴う発掘調査が行われ、新橋停車場時代の駅舎やプラットホームなどが良好な状態で発掘されたのです。その時出土したのが汽車土瓶でした。各地の駅名入りのものが大量に見られ、このことは明治時代末期から大正時代にかけて、国内の幹線網が現在に近い状態に整備されたことの裏付けともなっています。

霞ヶ浦を利用した水運が盛んであった土浦地域において、鉄道は東京と土浦を結ぶ新しい交通手段となりました。土浦駅売りのお茶が新橋まで旅人のお供をする—小さな土瓶ではありますが、新しい輸送手段の到来を象徴する、また土浦の近代化を予感させる資料といえるのではないかと思います。（宮本礼子）



汽車土瓶 汐留遺跡出土（東京都教育委員会蔵資料を借用のうえ展示）

このページでご紹介した資料を中心とする展示解説会を10/6（土）午後2時から開催いたします。



市史編さんだより

～～～ 『家事志 色川三中日記』 について ～～～

市史編さん事業では、色川三^{いろかわみなか}中(1801-1855)の日記「家事志」の翻刻版を刊行しています。「家事志」は実弟^{みとし}の美年が書き継いだ「家事記」とあわせると26冊になり、文政9(1826)年5月から安政5(1858)年5月までの32年間にもおよぶ記録です。その内容は日付、天候、1日の出来事や来客、事件にとどまらず、証文・願書^{ひとつて}の写しや人伝に聞いた事柄、和歌・漢詩などの文芸、見た夢・卦(吉凶を占う算木の記号)など多方面にわたっています。また物事の経緯や状況などが事細かに書き込まれ、人とのやりとりは話し言葉でそのまま記されているため臨場感にあふれ、近世の日記史料としては希有なものです。

三中は享和元(1801)年6月24日に色川家の長男として生まれ、幼い頃は豊太郎と呼ばれていました。父英恵は谷田部台町村で代々名主を勤めた今川伝左衛門家の三男でしたが、当時色川家には男子がいなかったため三中の祖父にあたる章英が英恵^{むこようし}を婿養子として迎え入れたのでした。

色川家は紀州熊野の色川村、南朝に仕えた平維盛の子孫でした。時期は明らかではありませんが常陸国南部を支配していた戦国大名小田氏の家臣信田^{しのだ}氏を頼って信太郎小岩田村に移り、小田氏が滅亡した後には武器を捨て、慶長年中に土浦に移り住んだと三中は書き残しています。寒村に過ぎなかった土浦にも城下町が築かれはじめ、17世紀後半にかけて商人も大勢移り住んできて店を構えました。色川家もそのひとつで薬種業と醤油醸造業を起こしました。しかし、その後災害が度重なり、経営は順調には進まなかった様子が「家事志」に書かれています。

「家事志」では、幕末の土浦の様子を三中の目線を通して垣間見ることができます。現在第三巻の編集を進めていますが、既刊の第一巻・第二巻をまだお手にとられていない方、ぜひこれを機会に一読をおすすめします。
(深谷誠一)

市史刊行物のご案内

『家事志 色川三中日記 第一巻』	色川三中の日記「家事志 壺」から「家事志 三」までを翻刻・収録。平成16年3月刊行	3,000円
『家事志 色川三中日記 第二巻』	色川三中の日記「附留 四」から「家事志七」までを翻刻・収録。平成18年3月刊行	3,000円
『土浦市史 民俗編』	土浦の風俗や慣習を聞き取り調査や資料より収集した成果を収録。昭和55年11月刊行	3,500円
『図説土浦の歴史』	図表や写真を中心として土浦の歴史を解説。平成3年3月刊行	5,000円
『図説 新治村史』	旧新治村の歴史を資料と図版をもとに解説。昭和61年1月刊行	2,000円

この他にもたくさんの刊行物がありますので随時ご紹介していきます。詳しくは当館までお問い合わせいただくか、当館のホームページ(<http://www.city.tsuchiura.ibaraki.jp/section/kyouiku/6008/index.htm>)をご覧ください。

次号からこちらの「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動記録などをお伝えしてまいります。

創刊号である本号では、展示室だより「霞」についてご紹介します。

新しい展示室と展示室だより

1988年に開館した土浦市立博物館は、20年目を迎えた本年7月3日、開館以来大きく展示替えすることのなかった展示内容を全面的に改装し、新たにオープンいたしました。新しい展示室は、これまでの常設展示とは異なる更新される展示室を目指しています。多様な資料群を順を追って紹介したり、調査研究の成果を随時公開できるように、季節ごと3ヶ月単位で定期的に展示替えを行うよう計画しています。これは、単に展示内容を様変わりさせるというだけでなく、資料保存にも役立ち、また調査研究のさらなる進展にも益するものと考えています。

展示室だより「霞」は、従来の展示資料の解説図録に代わるものとして発刊することにしました。資料の解説を中心に、博物館活動のお知らせなどを盛り込みながら、展示替えにあわせて3ヶ月ごとに継続して刊行していく予定です。博物館活動と同様に、一号、一号の積み重ねと蓄積がまとまった内容と成果に結びついていくものと考えています。移り変わる展示資料をご紹介します情報誌として、長くお付き合いいただければ幸いです。

★展示室だより「霞」のタイトル文字は土浦藩儒者関其寧による二字書「流霞」からとりました。また、タイトル背景に使用した写真は、2階展示ホール前の庭園風景です。瓦と桜川のさび砂利で表現された水紋のなかに、土浦城櫓門でつかわれた礎石が配されています。「水辺の地域に礎を築いた人々の歴史」を表現した庭園は、展示テーマ「霞ヶ浦に生まれた人々の暮らし」に通じるものです。

コラム(1) —博物館と虫のはなし—

I PMという言葉があります。「総合的有害生物管理」と訳されますが、ごく簡単に言うと「虫を入れない、繁殖させない環境づくり」ということです。ご存知のとおり、博物館にはたくさんの資料があります。古文書・絵画・民具などなどですが、これらの材質は紙・木材・藁と多種多様で、それぞれの材質を加害する(食べる)文化財害虫がいます。近頃は高松塚古墳の保存が話題となり、カビが文化財に悪影響を与えることが知られるようになりましたが、カビを餌にして繁殖する文化財害虫もいます。カビはもっとも警戒をしなければいけない有害生物といえます。

かつては薬剤により虫・カビを殺虫(菌)することが行われていました。しかし、薬剤使用が環境破壊などにつながることから、現在では薬にたよらないI PMの考え方が主流になってきました。当館では比較的早い段階からI PMの実践に努めています。館内に白い三角屋根のトラップが設置されていることにお気づきでしたか?害虫を捕獲して、文化財害虫の生息状況・侵入経路を確認するためのものなのです。(萩谷 良太)

情報ライブラリー更新状況

【2007・10・1現在の登録数】

古写真 197点(+77)

絵葉書 138点(+38)

※()内はリニューアルオープン時と比較した数です。
※2階展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新いたしております。1ページでご紹介した絵葉書もご覧いただけますので、ぜひご利用ください。

霞 2007年度秋季展示室だより(通巻第1号)編集・発行 土浦市立博物館
土浦市中央1-15-18 029-824-2928

次回展示(2007年度冬季)は2008年1月5日(土)からご覧いただけます。「霞」2007年度冬季展示室だより(通巻第2号)は1月5日発行予定です。次回のご来館をおまちいたしております。